

『ツァーリと大衆』 書評へのリプライ

A Reply to Book Review

巽 由樹子
TATSUMI YUKIKO

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Tokyo University of Foreign Studies, Graduate School of Global Studies

キーワード

出版史 読者 近代 国民国家 ロシア帝国

Keywords

history of publishing; readers; modern times; nation state; the Russian Empire

原稿受理日: 2020.1.12.

Quadrante, No.22 (2020), pp.111-114.

目次

1. 読者大衆と社会階層との関係
2. 皇帝の権威と民間出版との関係

2019年1月に刊行された拙著『ツァーリと大衆』は、7月に海外事情研究所で篠原琢先生を評者とする合評会の機会を得た。さらに今回、それをもとにした書評が『クアドランテ』に掲載されることに深く感謝する。これまでに拙著に対する書評は、橋本伸也(ロシア教育史)と貝澤哉(ロシア文学)によるものが公刊されている¹。ここではそれらで受けたコメントにも触れながら、篠原によるふたつの大きな指摘、すなわち、「読者大衆と社会階層の関係」と「皇帝の権威と民間出版の関係」についての批判に答えたい。

1. 読者大衆と社会階層との関係

拙著は挿絵入りの週刊誌という定期刊行物を史料として、19世紀後半～20世紀初頭ロシ

アの文化の社会史を描出した。依拠する資料体を、従来、この時代を論じるのに用いられてきた文芸・社会評論誌「厚い雑誌」や新聞、あるいは農村に行商人によって運ばれて流布した木版出版物ルボークから、ポーランド、ドイツ出身の企業家たちが刊行した西欧型の娯楽雑誌へと移したら、帝政末期の通史をどのように描くことができるか、という試みだった。ロシアの絵入り雑誌は、日常の些末な事象を図版とともに示す「軽い」読み物として、これまで補足的に言及されるにとどまってきた。だが、教育的でありつつも娯楽性を追求した、その豊かな内容や様式に接したとき、異なる可能性が想起された。近代史研究がベネディクト・アンダーソンらの理論的枠組みに依拠して出版を啓蒙や公教育に結び付け、国民統合へと議論を収斂させる傾向——篠原の言葉を借りるならば、近代をめぐる「大きな物語」——に必ずしも回収されるものではないのではないか、という問題意識を抱いたのである。

¹ 橋本伸也「書評 巽由樹子著『ツァーリと大衆:近代ロシアの読書の社会史』」『ロシア史研究』103、2019年、136-141頁；貝澤哉「書評 巽由樹子著『ツァーリと大衆 近代ロシアの読書の社会史』」『ロシア語ロシア文学研究』51、2019年、65-74頁。



上述のような構想により、拙著では絵入り雑誌を大衆文化と、「厚い雑誌」をハイカルチャーと結びつくメディアと見做し、それぞれの受容者も娯楽の大衆と啓蒙的知識人に区分して論じた。そうした二項対立的な叙述は、橋本、貝澤書評のいずれにおいても批判されたように、いささか図式的、硬直的で、いずれの定期刊行物をも手に取る人々の読書行動や、学術・専門雑誌も増加しつつあった出版市場の総体を見えにくくした憾みがある²。同様の問題は、絵入り雑誌とナロード向けのルボーク出版物の読書行動を切り離して考察したことにも認められる。両者が重なり合った読書の領域を分析することが、篠原の言う「『読者大衆』の向こう側の、文字の読めない『ナロード』の世界」との接合を可能にするだろう。

また、読者の社会階層を具体的に比定しようとした分析方法が、大衆とそれぞれの社会層、とりわけ、ナロードの関係に関する疑問を惹起したと考えられる。本書は第2章で、読者大衆の「大改革」後のロシア社会の構造における位置づけを明らかにしようとした。そのために、帝国内各県の公共図書館の年次報告書を史料とし、その利用者の記録から具体的な法的身分、職業のデータや人物像の記述を抽出した。そして読者大衆を、篠原が整理するように、「固有の消費志向の文化を持つ都市的な人々、社会階層的には、下級官吏から、町人、旧農奴身分出身の都市労働者まで含むもの」と定めた。だが、人的集合のカテゴリーは具体的に設定するほど、現実世界でそれから漏れる存在が出てくる。篠原が指摘した、「絵入り雑誌」の都市的なファッション・カタログに接してもナロード風衣装のままだった仕立屋は、その一例だろう。また、各県の公共図書館の年次報告書が全て、利用者の社会的地位を示すデータを記録したのではなかったため、本書では帝国の地理を網羅した読者像を提示

できたわけでもない。実体概念としての読者を設定すること、それを分析概念としての読者と結びつけることの難しさからは、方法について反省が必要である。しかし他方で、読者を、同一の読み物を共有した解釈共同体として抽象的に想定する前に、まず一次史料の分析に依拠してその実相を示すことが、実証的な歴史学研究が取り組むべき作業ではないか、とも思う。批判を甘受しつつ、そこから受ける示唆を方法の深化につなげていきたい。

篠原は、多宗派・多民族帝国ロシアでのロシア語出版と諸民族言語との関係にも言及している。「ハプスブルク君主国の場合、識字率の向上、出版業、特に『軽い読み物』の拡大は、諸民族言語による出版文化の成長を促した。この点、ロシア帝国ではどうだったのだろうか」という問い——合評会の折の記憶では、ハプスブルク君主国では公定言語による「軽い」出版が諸民族言語による同種の出版物の刊行を促し、競合を招いたが、ロシア帝国ではどうだったのか、という質問——は重要である。ロシア帝国では、公定言語であるロシア語出版が19世紀半ば以降に本格的に普及したのに対して、帝国西部から流入する独、仏、ポーランド語出版の成熟はより早く、東部のイスラーム圏における出版活動の本格化は19世紀末～20世紀初頭だった。こうした状況下、ロシア語出版は文化の先進地帯において必ずしも優位に立ちえなかった。他方でロシア語出版は、ロシア・シオニズムの論者たちが機関誌をロシア語で刊行したように³、非ロシア人共同体で帝国内の共通語による出版として活用されるという、言語とネーションとが直結しない事例も見られた。このようなことから、ロシア語出版が大ロシア主義を涵養し、帝国内諸民族が自言語によって個々にそれと対抗的な公共圏を作り出したという、既存の研究でしばしば見られた枠組みだけでは、帝国のロシア語出版の歴史

² 橋本、139-140頁；貝澤、70-71頁。

³ 鶴見太郎『ロシア・シオニズムの想像力：ユダヤ人・帝国・パレスチナ』東京大学出版会、2012。

は説明できない。そうした問題意識から、ロシア帝国の出版史を、18～20世紀初頭のロシア語出版にロシア人・非ロシア人双方がどのように参画していたかという観点から考察する論文集⁴の刊行を準備している。

2. 皇帝の権威と民間出版との関係

篠原のもうひとつの指摘は、絵入り雑誌におけるツァーリ表象を検討した拙著の第5章は、第一に、消費文化に働く政治性への視角を欠いているのではないか、第二に、政治権力は民間出版物と協力関係を築き、皇帝の権威を増幅させることに成功したのではないか、ということである。貝澤も同様に、第一の点については、「主体」が、特定の外的で社会的な権力規範や支配関係を自らの身体に内面化することで立ち上がってくることへの認識が不充分であることを批判し、第二の点については、エリック・ホブズボームの議論をひきながら、伝統が複製技術によって「大量生産」されることは聖性を大衆化し、新たな形で権威を高めたと考えるべきではないか、と指摘している⁵。たしかに本書では民間出版の主体性を強調するあまり、第一の点について、消費文化に働く固有の権力関係を十分に検討できていない。指摘の通り、今後、ハプスブルク君主国をはじめとする他地域の状況をも参照しながら、あらためて考察を深めるべき課題である。

他方、第二の批判で、政治権力が出版物をコントロール下に置き、国民統合に活用したとする観点は、出版と国民国家の形成が結び付けられてきた近代史研究の枠組みと呼応しているように思われる。冒頭で述べたように、近代の出版を分析するにあたり、こうした枠組みが必ずしも常に適切だとは限らないのではないか、というのが拙著の問題意識だった。たしかに絵入り雑誌はツァーリの姿を肯定的に伝

達し、その権威の流布に貢献した。だが、営利的な雑誌が宣伝販売した皇帝のプロマイドは、同じ君主の肖像とはいえ、たとえば多木浩二が明治国家による編纂の痕跡を解き明かした天皇の御真影と、同じ手触りをもって受容されただろうか。拙著の序論で触れたように、帝政期ロシア史研究において、消費文化研究の蓄積はいまだ薄い。そうした消費文化の中の新たな出版メディアとツァーリ専制の相互作用は、国民国家と出版に関わる定着した理解の枠組みを適用する前に、その固有の文脈が検討される余地がいまだ大きく残されているように思われる。

絵入り雑誌が、近代の出版を国民統合との関係の枠外で論じる可能性を想起させるのは、そのトランスナショナルな性格による。拙著で示したように、近代ロシアの営利的な出版産業は、ヨーロッパからの移入者によって基盤が作られた。絵入り雑誌は、まさにその「国際的な文脈」の只中にあった。すなわちこのタイプの出版物は、英、仏、独を淵源として、欧州全体やロシアだけでなく、南北のアメリカ大陸、あるいはオスマン帝国、エジプトをはじめとするイスラーム圏など、世界各地で発行されたのだ。それは先行する刊行物が、ライプツィヒの書籍市をはじめとする国際的な出版市場を介し、書籍商によって諸地域に運ばれ、そのフォーマットが模倣されることで起きた現象だった。電信網の利用によって同一内容の記事が掲載されることや、同じ図版が複製されて用いられることで、コンテンツも共有されることがしばしばあったし、題字や装飾の配置もきわめて類似していた。

現代世界のメディア研究において、アルジュン・アパデュライは、共通するフォーマットのメディアがグローバルに流通してひとつの共通の地平が形成されていることを指摘し、それが

⁴ Yukiko Tatsumi, Taro Tsurumi (eds.), *Publishing in Tsarist Russia: A History of Print Media from Enlightenment to Revolution* (London: Bloomsbury, 2020).

⁵ 貝澤、71-73頁。

地域によって異なる受容、読み替えをされた様相を精緻に分析する必要を説いた⁶。これに応えて現れた television format studies と呼ばれる分野の諸研究は、2000 年代以降、タイトル、スタジオセット、演出方法などの番組フォーマットがセット販売され、国境を越えて、見た目や進行が酷似したクローン番組——たとえばクイズ番組『ミリオネア』やリアリティ番組『サバイバー』、日本発の『アイアンシェフ』——が各国で制作される現象に着目している⁷。グローバルなコンテンツ産業によって展開するテレビ番組の遷移は、近代において営利性をもって販売された絵入り雑誌の国際的な普及と類似する。もちろん、近代世界の出版メディアが均質で標準化された時間と空間の認識をもたらし、人々に「水平・世俗的、時間・横断的」な共同体の想像を可能にしたことは、出版資本主義論で指摘されてきた。また、それぞれの地域で、それぞれの雑誌は現地語への翻訳などを通じてナショナルな文脈に属することになったのであり、そこには公教育や国民国家の存在が立ち現れる。だが、国民統合に直接結びつかないトランスナショナルな性格は、捨象されてきたのではないだろうか。近代ロシアの出版は、専制が対処しえたのかということも含めて、国境を越えるメディアという側面から論じられる必要もあるのではないか。

アパデュライの理論は、1990 年代以降のデジタル・メディア普及に立脚したグローバル文化の展開を考察するものであり、これをそのまま近代に適用するのは時代錯誤である。しかし篠原も言及したように、ポスト冷戦時代のグローバル世界を論じたネグリ／ハートの『帝国』は、歴史学研究が過去を遡り、近世帝国を再考する際の刺激のひとつとなった。そして実証的な史料分析によって形成された帝国論

が、中央政府と地方エリートとの交渉によって構築された帝国の統治システムを明らかにしたことで、国民国家を終着点とする通史の理解が見直されつつある。それならば出版と国民統合をトランスナショナルな文脈から問い直すこともまた、近代の大きな物語を再考する試みとなるだろう。歴史学の役割は、理論的な枠組みを追認する事例を提供することではなく、史料の収集と実証的な分析により、通史理解の枠組みを不断に見直していくことにあるのではないかと思う。こうした課題意識に立ち、史料と方法について理解を深めながら、今後、近代の出版物の国境を越えた拡散と受容の研究に取り組んでいきたい。

⁶ Arjun Appadurai, *Modernity At Large: Cultural Dimensions of Globalization* (University of Minnesota Press, 2011).

⁷ 石田佐恵子「テレビ番組のトランスナショナル：コンテンツの輸出入・フォーマット販売から映像配信サービスまで」、高馬京子・松本健太郎編『越境する文化・コンテンツ・想像力：トランスナショナル化するポピュラー・カルチャー』ナカニシヤ出版、2018年、81-82頁；大場吾郎『テレビ番組海外展開60年史：文化交流とコンテンツビジネスの狭間で』人文書院、2017年、251-266頁。